

コント「サプライズの女」

男→スーツのサラリーマン 34歳くらい

女→部屋着の女 スリッパ 27歳くらい

男（燃え盛るアパートと集まる野次馬に引き寄せられ、出火元のアパートの目前まできて）

男「めちゃくちゃ燃えてるじゃん」（躊躇なくスマホを燃えるアパートに向け）

男「うわー、これはバズるぞー、てか、これ、消火しきれるのか？」

女「うーわ、めっちゃ燃えてる！めっちゃ燃えてる！！」（高いテンションで、スマホカメラを燃えるアパートに向け、落ち着かず色んな角度から撮りたいのか、野次馬たちにぶつかり）

男「痛っ」（女からぶつかりやっとなんかカメラから目を離し）

女「えー、これ、こんな燃える！！こんな燃えるの!?えーこんなっ…」（更に男にぶつかり）

男「痛っ…」（再びぶつかられるとスマホをしまい、女を睨みながら女の方に行き）

男「ちょっと、ちょっとアンタ！」

女「たまやー！いや、たまやーは違うか、花火じゃないし…」（男に気づかず、スマホ越しの炎に夢中で）

男「おい！アンタ！」

女「はい？」

男「アンタ、正気か!!人の家が燃えるんだぞ！それなのに、そんなにはしゃいで祭りじゃないんだ！」

女「えー、だってこんなのはしゃぐしかないじゃ無いですか！」

男「アンタねー、ここに住む人の事を考えられないのか!?犠牲者が出るかもしれないんだぞ！」

女「いや、これ私の家なんで」

男「は？」

女「今燃えてるの私の部屋だし…」(言いながら、涙ぐみながら嗚咽をもらして)

男「いや、え、どう言うこと…」

女「(鼻をすすりながら) 今燃えてる部屋……私が燃やしちゃって…」

男「え、そうなのッ、あんたが燃やしたん？」

女「はい、彼氏の誕生日なので、サプライズの準備して待ってたら…そのタイミングで、LINE が来て…彼氏から別れようって…」(鼻水をすすり言葉を詰まらせながら話す)

男「そうなんだ、それはショックだね…」

女「そしたら、呆然としちゃって…うっかり、火を落としちゃって…気づいたら、手に負えないくらい、火の手が回って…だから、もう狂わないとやってらんない！(拍車をかけて泣き出す)」

男「この人、ヤバい野次馬と思ったら、散々な目に遭いすぎて、一周回って狂った人やった」

女「もう、なんで…振られなきゃなんないの…」

男「いやー辛いですね…折角、サプライズでケーキを準備してたのに」

女「いや、サプライズで準備してたわ！ケーキじゃなくて、ファイヤーダンス!!」

男「ファイヤーダンス!?ファイヤーダンスって、あの火を振り回す」

女「そう！ハワイで見るやつ…なんで、私がこんな目に…」

男「いや、家燃えたんも、フラれるんも原因アンタにあるで！」

女「もう、こんなに燃えて、私と彼の思い出の部屋が…」

男「いや、こんなに燃えたら、跡形残らないですよ！…どっちが家具持ち出すか揉める手間省けたって考えたら儲けもんでしょ！」

女「言うてる場合！……もう私が部屋に突入します！！」（辺りに水気は無いか見回して）

男「いや！危険ですって！消防に任せましょう！」（止めようとして）

女「本当のファイヤーダンス見せて上げるわ」（男を振り切り、水道とバケツを見つけ、そこに走り出し）

男「どう言う意味？」

女「ううっ…ううっ…」（泣きながら、水がたっぷり入ったバケツを持ってきて）

男「ちょっと危ないって…」

女「私が部屋を取り返すの!!」

（勢いをつけようとするも、腰が引け、ゆっくり肩から水をかける位の勢いで）

男「いや、ビビリ過ぎて、かけ湯みたいになってるやん」

女「私と彼の思い出一!!」

（ちょっと濡れた状態で、火の元に飛び込み）

男「いや！ちょっと！えっ、大丈夫…うーわ、あの人大丈夫かな…」（少し心配すると、またスマホを出して燃えるアパートをスマホカメラで映し）

女「これだけ…持って帰ってこれた…」（女が持ってきたのはサプライズで使うはずだった『ドッキリ大成功』の看板で）

男「うわ、これ持って、バッドエンドな人はじめて見た…」（スマホを下ろし女を見て）

